

幼 兒 教 育

第二十一卷
號

大正十年七月十五日發行

童話選擇の諸原則

|| 總會に於ける講演大要 ||

東京帝國大學講師
文 學 博 士

松 村 武 雄

最近の傾向では、童話にいろいろの種類がある。

我々大人の心の中に潜んでゐる「子供の心理」に訴へるもの即ち大人のために書かれたものがあり、子供が自分でつくつた童話がある、また、未開人がつくつた多くの話は何れも大人を相手としたものである。

それから、現代の大人が子供のためにかいた童話がある。今日此處で、私がお話しようとするのは、大人のためにかいたものでもなく、子供自らがつくつたものでもなく、大人が、子供に與へるためにかいた童話及び昔から存じて居るものについてである。そこで童話には、自ら優劣の差があり、取捨選擇の必要のあるは申す迄もない。次にその選擇について述べて見る。

◎ 大體論

一、主知論 主情論

主知論といふのは、即ち知的方面、科學的方面を重する一派で、學問的知識に背戻し、科學的正確に矛盾する話は、子供にまかせてはいけないとする。勿論、知的方面を重するといふことはよいが、私の考では、大人の科學が必ずしも子供の科學にはなるまいと思ふ。子供には、たしかに、子供の科學がある。例へば雷様がお臍をどりに來るといひ、桃の中から赤坊が生れるといつても、兒童のある心的發達時期には、これを何の不思議もなしに信するのである。子供の心理状態は大人とは違ふ、彼等がある解

釋に眞實性を認めてゐる間は、それが大人の科學と一致して居らぬからといつて之を排斥するには及ばない。童話の目的は、知的な科學的なものを教へこむといふことを第一義とするのではない。また兒童の心性が多少發達して科學的にそんなことはないといふことを知る時代になつても、おはなしとしては、興味を存することがある。

「兎、兎、何見てはねる、十五夜お月様見てはねる」。といふのでも、實は月を見てはねるのではなくて、自分の先に行く仲間の兎の尾の下の白いところを見てついで行くのであるとわかかつて來ても、お月様を見てはねるといふところに童話としての面白さがある。兒童はそこを喜ぶのである。

主情論といふのは、主知論と反對に、只管科學的知識の勃索をきらつてたゞ、濕ひのある、情緒的な要素を取扱ふのが童話の本質的な目的であるといふのである、これもまた一方に偏した考へ方で、何もの知的方面を入れてはわるいといふ事はない。要するにこゝ何れの一方に偏してもよくないのである。

二、教訓中心説と興味中心説

教訓中心説といふのは、童話の中に何等かの形で必ず道德的な教訓をふくんでおらねばならぬとする説であるが、これもまた極端である。子供はある時期には、たしかに無道德の時代即ち道德といふものが意識の對象にのぼらぬ時代に居る、この時代に強いて道德をもち出しては反つて面白くない結果を生ずる。

興味中心説といふのは、何でも子供の興味を中心とせまいといふので、これまたあまり極端すぎる。

一體、教育といふことは、知とか、徳とか、情とか、その一つにかたまるべきものではない。完全、渾一の人格體をつくるにある。それならば、子供の心の糧となるべき童話を選ぶ上にも、何れか一方に偏したもののだけを與へよといふ事は出来ない。

要するに、童話は知的方面とか、情的方面とか、或は教訓とか唯その一つを覗ふべきではない。これらが何れが要素となつてゐてもよい。唯問題はこれ等の要素が如何に巧に話の中にあらはれて居るかといふことで、話をとらぶ的が定まるのである。要はあらはし方の如何によるのである。

たゞし現代の傾向から云ふならば、どちらかとい

へば、主知的にかたむき過ぎてゐるやうである。私達は現代ではもつと柔かな光ある情緒を要求する。情緒が發達しなけば、徳者知者ばかりではうまく行かぬ。例へば、我々はどかく、櫻を折るべからず、どいつておさへつけるが、これを彼等の情的方面から、折るにしのびないといふ心持をおこさせるように、花を愛するといふ性情をやしなふようにしたいのである。

◎細論

○消極的原則

一、兒童の生活に適せぬ分子の排除

従來傳はつてゐる話は、現今の文化民族が未だ未開時代にあつたときに發生したものが多し。従つてその時代の生活様式や社會組織を反映したものが少くない。女性獲得の爲めの争闘、宗儀の説明、食物に對する欲求の爲めの窃盜、その他性的關係をあらはしたものとこれである。かゝる要素は兒童の生活に適せぬ分子として當然排斥すべきである。

たとへば「ある所に一人の男子あり、妻及び他に一人の女をもつ、妻は老いて居るので、夫の髪の毛の

黒い部分をぬく事をつとめ、一人の女は若いために、夫の白髪をぬいた。そこで、この男が二人の女の間を往來する中に、頭が禿になつた」。

かゝるものはよろしくない。

また、未開民族の間では食物は價値の中心であつて之を得るための争がなかく盛に行はれたので、この頃のもので今残つてゐる話には殘酷なものがある。これもよろしくない。

二、殘忍なる要素の排除

子供には、どうも殘忍性がひそんでゐるようであるが、話の影響のためにこれを助長させるようなことがあつてはならない。北原白秋氏の、

母さん、母さん、どこへ行た、紅い金魚と遊びませう。

母さん、歸らぬ、さびしいな、金魚を一匹つき殺す。

まだまだ、歸らぬ、くやしいな、金魚を二匹締め殺す。

なせなせ歸らぬ、ひもじいな、金魚を三匹ねぢ殺す。云々

などは、この意味であまり感心しない。かの昔か

ら傳はつてゐるカチ／＼山の話はどもよろしくない。もしも、一つの話の中で、その中に含まれてゐる殘忍性をどりのけると話全體が味がぬけてしまふといふような場合には、之を話す時に、その殘酷な部分を、あつさりど、どぶようにして過ぎるのがよい。

三、慘陰奇怪なる要素の排除

子供の時代に、何も好んで慘陰な不思議な話をきかせる必要はないのである。こはいもの見たさといふことは子供にもあるが、かゝる種類のものは害あるとも何の益にもならない。例へば英國の童話の中に。

「二人の人が火にあたつてゐると、骸骨が窓から其の男のそばに飛びこんで来る。それが初めに、首、それから、胴、手足、といふように、バラ／＼にとびこんで来る」。

ど、いふごとき話、この中には優雅なところは何もふくんで居らない。かゝるものは避るがよろしい。

四、反道徳的分子の排除

道徳に反したものを取除けるといふことは、一寸考へれば簡單なようであるが、さて、實際の童話について、果してどの點が道徳にそむいて居るかとい

ふことを見出すといふことは難しいことである。反道徳と無道徳との區別に周到鋭敏な洞察を下すだけの心的優秀がなくては、うまく行くものではない。例へば、グリムのお伽噺の中にある話で、

「ある王様に三人の皇子があつた。王様が皇子達に「お前達の中で最もひどいなまけものに王位をゆづる……」と仰せになり、三人の皇子はお互に怠けくらの話をする。そして一番うまく怠ける話をしたものに王位が譲られることになつた」。

といふ筋がある。これも考へ方一つで、怠慢の獎勵であるからして反道徳的といへば云へないこともないけれども、實際この話をよく讀んで見ると、なまける事を獎勵するのではなくて寧ろ滑稽な明白に道徳に矛盾したことを平氣であらはしてゐるところに興味を覗つた無邪氣な話なのである。嘗つて、獨逸に於て、修身の教授達がグリムの中から兒童の讀物として適當な童話を選択したとき、この話がその一つであつたのを見ても、悪い話でないことがわかる。かくのごとく、反道徳を排除するといつてもそれが取捨には深き考慮を要するわけである。

五、形式上の排除點

これは、内容ではなくて、表現上のことである。あまり長き文章及び形容詞、副詞の多く用ひられてゐるのは感心しない。兒童の呼吸、動作律等に合はないからである。現今行はれてゐる童話の中には、大人には誠に面白くよめるが子供に相應せぬのが可成にある、子供のための童話は、動詞と名詞とを巧みに用ひて、形容詞や副詞を少くするのがよろしい。子供は動作から来る鮮やかな印象をうけてよろこぶものである。また話の筋が複雑すぎてはいけない。二つの筋があるとするれば、それが並行せずに必ず主副の關係となつてゐる事が大切である。そうでなければ、いたづらに頭腦をつからせ、話の効果をよわめてしまふ。

○積極的原則

A、主觀的原則

主觀的原則といふのは、子供の方から見て即ち兒童は如何なる要素が含まれてゐるときに最も感興を起すかといふ立場から選ぶ原則である。大人が如何に面白いと思つても子供に果して面白いかどうかはわからない。そこで、如何なる要素がふくまれてゐる時にこれが得らるゝかを考究する事が大切である。

一、生活感

いかに幼なくとも、物心のつく頃から、既に、子供は自己特有の生活に入り、自己の生活を享樂し、自己の生活に興味を持つもので、これから引きはなすことは出来ない。したがつて、話も子供の生活がよくあらはれてゐるのが彼等の興味をさそふので、これは、日頃子供に接して居ればわかることである。

二、親密性

子供は經驗が貧弱で、範圍もまことにせまい。それで、自己の經驗した範圍のことが話の中にあらはれて來るのを喜ぶのである。岸邊氏が、五歳の子供のつくつた話として、

「どんぼが竹の先にどまりました。飛行機がどびました。どんぼが驚いて飛びました。その時に飛行機から靴をおとしました。すると、お猿が靴を拾ひました。そして木にのぼりました。人が下から竹の棒でつきました。猿がお辭儀をしました」。といふの發表して居られるが、これでもわかるように、子供は自分のせまい經驗の範圍内にあるものに興味をもつのである。

三、想像性

子供は少し成長して來ると、過去の經驗を材料として、新しい世界をつくる。この時期には、その話も想像を中心としたものがよい。しかし、想像的な物といつても、之を話の中に具體化、現實化させておく必要がある。感覺的物象化して置く必要がある。また子供の想像力は大人のそれと異つて、誠に自由ではあるが、一面には理窟を欲求する傾向があることを忘れてはならぬ。その想像は實世界の經驗に拘束せられ制限せられるといふことが少なく、まことに大膽な自由なものである。しかし、いかに自由でも大膽でも、其處に實際上の理由がなければ子供は承知しない。例へば、杖で一度たたくと何でも出るといふ。この時にその杖が魔法の杖であるといふところに子供は理由をおくのである。我々ならばこの場合に無理に魔法といふものを假定せずとも何となく不思議であるといふところに神祕な醍醐の妙味を感ずるのであるが、兒童にはそんな神韻縹渺たる想像、たとへばコルレッヂの『古海客の歌』の如き想像の味は解せられぬ。そこに兩者の差異がある。

四、驚嘆

子供は、また、未だ知らざる事物に對して知りた

いといふ欲求がある。これが盛になつて來る時期には新しい事物を熱心に探求せんとするのである。これは、誠に喜ばしい傾向で、充分によく導くといふことが大切である。この時期には話もこの傾向のものを選ぶがよい。かの説話學上で Why So tales と呼ばれる、一群の童話圈の如きはこの欲求に對する好い『心の糧』である。例へば、「何故象の眼は小さいか」といふことを説明して曰く。

「昔々、象は大きな眼をもつて居つた、そこへいたづらな兎が來て、象に見せびらかしながら果物をおいしそうに食べてゐる。象がきくと、『私は自分の眼を出してたべてゐると答へる象も自分の眼をたべたくなる。そこで、兎が象の頭の上のぼつて象の眼を一方どり出して、眼だといつて、持つてゐた果物を象にやる。象はこれを食べると成程うまいので、も一つの方の眼を出してもらふ。その時兎は象の二つの眼をもつてにげてしまふ。象が氣がつくと眼がないので、何にも見えなくなつて困つて、通りがりの動物に眼を一寸貸して呉れさたのむ、しかしなか／＼誰も貸して呉れぬ。とう／＼蚯蚓が貸して呉れる。象はいそいで之を自分の眼の穴に入れてにげ

る。そこで象の眼は小さくて、蚯蚓は眼をまだ返して貰はぬので眼がないのである」。

かういふ種類の話を子供は眞理性をみとめながら大きく時期がある。

五、神祕性

また、子供は不可思議なものを好む。彼等は、不可思議なことをきくと直に或るものが生ずべしとの期待より来る心的緊張とその或るものが何であるかを知らんとする欲求とが彼等の心に生れる、従つて彼等の興味をひくのである。またいよ／＼その或るものが現れて来ると、今迄の心的緊張が快くとける、そこにまた興味を感じるのである。例へば、

「ある時、一人の子供が散歩してゐると、小人が鬚を蟹にはさまれて困つてゐるのに出會ふ。そこで之を助けてやると、小人は子供にお禮として杖をくれる。それで岩をたゞと何か出るといふ。何が出るだらうかと思つて叩いて見ると、岩の中から七人の騎士が出て来る。その七人がテールをかこんで寝てゐる。その中の一人の鬚が長くのびて、テールを七巻きする。そこでこの人を起したらどうなるかと思つて、鬚を引きに行く……云々」。

と、いふごとき話が兒童に喜ばれるのは這般の心理にもとづくのである。

六、感官印象

子供は、色、香、運動等、五官にふれるものから強い印象を受ける。西條氏がこれについて實例を話しておられるが、それは、氏がある時、兒童を連れて須田町のところで、電車に乗らうとしてゐると幼兒が「蜜柑々々」といふ。欲しいのかと思つて、蜜柑屋を探したがすぐ近所にはない。尙よく見ると電車線路の隅に、小さな蜜柑がころがつてゐたのであつた、と。また、ある時、氏が幼兒を抱いて、大きな邸宅のまへを通つた。氏は試みに「これは何か」ときいた。家といふだらうと思ひ、またそう教へるつもりであつたところが、子供は意外にも「花々」といふ。見るとその邸宅の塀の隅に芙蓉が咲いてゐたのであつた、と。全く子供の眼には豪壯な邸宅は眼中になく、たゞ色の美しい花がその感官を刺戟したのである。そこで、この欲求を満足させるような話が兒童に愉快を與へるのである。たとへば音を取扱つた面白い童話としては、

「豚が橋を通る。橋の下に鬼が居つて、之を喰べよ

うとして、其足音を聞いて居ると、初めて小さな豚が、キイ、と通る。鬼は、もつと大きいと思つて之を見逃すと、次には、中くらゐの豚がキイ、と通る。これも感心せぬと思つて待つてゐると、今度は大きな豚が、グイ、と通る。するとその音がひどいのでこはくなつて、鬼が逃げ出した。

といふごとき、又色彩感に訴へた童話としては、ギリシヤのお伽噺に、

「少女が池の端に坐して、小刀で木を削つてゐると、その木屑が水に落ちる。すると、それが、五色の鳥になつて飛び立つ。その時にその鳥に太陽の光があたつて實に綺麗である」。

といふごときは何れもよい例である。

七、冒險と成功

あまり幼ない頃には、まだこの方面に興味は起らないが、少し大きくなると、冒險談 成功談が、彼等の興味をひく、これは彼等自らの内に有する力を發揮させて、その實際的な證券を得たいといふ欲求にもとづいてゐる。この欲求はわるくゆけば亂暴や暴虐になるが、よく啓導されると、自信、勇氣、義侠となる萌芽である。従つてこの傾向を話によつてよ

く導いて行く必要がある。

八、活動性

子供は動的な状態を好むものであるから、これが適當にあらはれてゐる童話は自ら兒童の愛好するところとなる。例へば、印度から日本に傳はつた話であるが「雨家の漏り」といふごときはよき例である。

「或る晩一匹の虎が人間を食べようとして人家に忍び寄ると、家の内でお爺さんとお婆さんが話をしてゐる。お婆さんが『虎が怖い』といふとお爺さんは『いえ、虎よりも雨家の漏りの方が怖い』といふ。虎がこの雨家の漏りを怖がつてゐると其處へ馬盗人が来る。そして虎を馬どまちがへてとびのると、虎は「雨家の漏りが来た」と思つて馬盗人をのせたまゝ駆け出す。夜が明けて見ると虎の背にゐることに氣のついた馬盗人はびつくりして、駆けてゐる途中で近所の木にとびあがつてしまふ。この時虎は、雨家の漏りからのがれたと思つて大よろこびで行くと猿に出會ふ。そこでこの話をする猿はそれは多分人間だらうといふ。兎に角ひきかへして生體を見届けようと、虎と猿とがひきかへて来る。此時に先の馬盗人は木から足をすべらして、下にあつた穴の中に

落ちてしまつてゐた。猿がその穴の中に尾を入れる。すると人間はよいつかまり繩が来たとおもつてこれにつかまる。猿はびつくりして「これは本當にあまやのもりといふ怖いものだ」と急いで逃げる。この時急にのぼせたので頬があのように眞赤になり、逃げるはづみに尾がきれたのである。

九、滑稽感

滑稽味のあるといふことも望ましい。子供は無邪氣な笑を好むものである。従つて滑稽味を要素とする話は彼等のよい滋味となる。たゞそれがあどけない上品なものでありたい。例へば、アッシリアのお伽噺の中に次のようなのがある。

「二人の男が子供をつれて人込みの中に出かけた。あるかせるのに骨がおれたのでその子を肩にのせてしまつた。ふと、氣がつくと。今迄つれて居た子供が急に傍におらない。びつくりして探し初め、通りがゝる人皆に聞くが誰も知らない、するとある氣のきいた人が「肩の上に居るぢやないか」といつて肩からおろす。するとその男は「今迄何處へ行つてゐた？」と子供に聞く。子供は「先刻から肩の上に居つたのに」といふ。

また、これと同じ様な話であるが。

「七人の男が柴刈りに行く。かへる時に皆をならべて、その中の一人が列をはなれても人数を數へる。自分を數の中に入れることに氣がつかないのでどうしても六人しかおらない。次の人、次の人とかはり／＼に出て數へるがどうしても一人足りない。大に悲しんでゐると其處へ通りかゝつた旅人が、「それは氣の毒だ、今この足りない一人を出してやらう。そのかはり少し痛いぞ」といつて七人の一人一人を自分のまへに來させて、頭をボカリと打つ。七人そろつてゐる。柴刈りの連中は七人居たといつて大喜びで、その旅人に厚く禮をのべる」。

十、誇張(極大と極小)

大きいといへば、度は分れて大きいもの、小さいといへばごく小さいもの、かういふ誇張した味を含む話を子供はまたよろこぶものである。大きい方の話の例としては、

「昔、鵬といふ鳥が居つた。自分が世界中で一番大きいと思ひ込んでゐたが、ある時旅行を思ひたつたが、翼を一度動かすとそのまゝ一里もとぶといふほどである。しかし海上をとびあるく中に草疲れたの

で岩をさがすと、岩は見あたらなかつたが海の上に樹が生へてゐる。そこでそれにどまつて一夜を明かして翌朝とび立たうとする。その樹が動いて、「己の鬚にとまるのは誰だ」といつた。それは大きな海老であつた。そこで鵬はもう自分よりも大きなものがあるといふことがわかつたが、今度は海老が我こそは世界一といふわけで大いばかりで海の中を泳ぐ。疲れて岩と思つてそこにあつた洞穴にとびこむと穴と思つたのは大きな龜の鼻の穴であつた。

また、スカンデナビアの話に、

トル (Thor) といふ雷いかづちの神があつて、いつも、槌を携へてゐる。この神がある時旅行した。休み場所を探したが、やつと大きな穴を見つけた。その穴の奥に大小五つの穴が更にあいてゐるのでこれはよいところと思つて、その中の一番小さい穴に入つて其處でねてゐると、その岩がふるえだす。それは巨人の鼾のためである。雷神は驚いて槌でその巨人の額を打つと「何だ、木の葉が落ちたのか」といふ。今度は、巨人の額に槌の柄が入りこむ位に打つと「何だ、ドンダリの實が落ちたのか」といふ。雷神も困つてしまつて、夜があけてからよく見ると大穴と思つたのはそ

れは巨人の手袋で、一番小さい穴とおもつて入つたのは巨人の手袋の小指であつた」。

極小の話としては、我國では一寸法師の話、また、外國のものとしては「拇指のトム」の話は皆もよく知るところである。

十一、韻律と反復

子供は韻律を愛好する。それは韻律が不知不識の間に彼の motor Sense (運動感覺) に訴へて、快き運動を起させる、そこに快感をおぼえるからである。

それ故にこれは童話にも童話にも必要なものである。また話の中に同一もしくは類似の事件をくりかへすといふこと即ち反復がまた大切な要素となる。何故なら反復は物語の筋に明晰と統一とを與ふるからである。そして最小の勞力で最大の話をうけ入れられるからである。而して同じく反復といつてもそれにはまたいろいろな形式がある。

A、漸層形式。……類似の事件がくりかへされる度に大きくなる話例へば印度の話に、

乞食が一碗の飯を貰ひうけ。それを眼の前に置いて次の様な空想にふける。この飯を賣つて穀物の種子を買つて、それをまく、すると、それが芽を出す。

實を結ぶ。それを茹り取つて賣つて今度は牛を買ふ。その牛が兒を生むので、大金持になつて、大なる邸宅をつくり、妻をもらひ、子をもらふ。その子供が、自分の言ふ事をきかないので蹴る。ふと氣がつくと蹴たのは子供ではなくて、眼の前においてある大切な一椀の飯でそのために飯は地上にこぼれて役に立たなくなつてしまつた」。

B、漸墜形式

……これは類似の事件がくりかへされる度に小さくなつて行くもので、例へば、

「ある男がその妻に向つて話すのに『山で大きな蛇にあつた。太さが五六尺で長さが三町もあるといふ。妻がそんな大きなのはある筈がない』と本當にしないので、いや二町ぐらゐであつたといふ。それでもまだ本當にしないので『驚いたから大きく見えたのであらう、一町位であつたらう』……かうしてどうく『三尺位であつた』といふと妻は『太さが五六尺で長さが三尺では、酒樽の様な蛇ですな』と」。

C、循環形式のもの……これは、類似の事件をくりかゝりして行く中に出發點にかへるものである。例へば、「鼠の嫁入りの話」の如きはそれである。

「鼠がその娘を嫁にやるのに器量のよい偉い人を

夫にもたせようと思つて、初めに太陽のところへ行つて『あなたが一番えらいから娘をもらつて呉れ』といふと太陽は私は雲には勝てぬといふ。そこで雲に行くど、雲は風に勝てぬといふ。風に行くど風は壁にはかてぬといふ。壁に行くど、壁は鼠には勝てぬといふ。そこで結局、鼠が一番えらいといふことになり、鼠の嫁にした。

以上のべたものは、子供自身の心理から見て興味をおこす原因であつて、これらの諸要素を巧にとりあつかつたものが優秀な童話というわけになる。次に、

B 客觀的原則

即ち、いかに子供がその主觀的の立場から好むとしても、何でも無條件に與へるといふわけには行かない。年齢により、心的發達の如何によつて考へねばならない。そこに客觀的な選擇の標準の必要が生れる。

1、兒童の心的發達の顧慮

一、現實愛好時期

實際に直觀出來るものを愛好する時期言はツリア

リズムの時期をいふので、これは何歳位ときめてしまふことは出来ない。何とならば、境遇によつていろ／＼であるからである。この時期には、あまり抽象的な話はかへつて食傷してしまふのである。

二、想像馳騁時期

子供が凡そ十年前後になると、たゞ日常ありふれたものだけでは興味がなくなる。盛に想像によつて新しい世界をつくる。この時にはやはり想像的な傾向のものを多く興へてその自然の發達を助けるようにするのがよろしい。しかし、その指導は實際上餘程困難なものである。材料をどこ迄も優秀なものを選ぶべきである。

三、勇力讚仰の時期

少し大きくなると子供は力試しをして見たいといふ時期に入る。古代の偉人に心をひかれたり、偉人と我とを比較したり、實に時代と場所とを超越してしまふ。これが悪く行けば亂暴であるが之をよく導くといふことは、彼等の自然の發達を助ける上に大切な事である。

四、傳奇趣味の時期

腕力をふるつて、力試しを喜ぶ時期から、間もな

く落ちついた、しんみりした時代に移る。どちらかといへばローマンチックになつて、情味の勝つた話、愛の問題を含んだものが好きになる。この時期には話もまたそれに適したものを與ふべきである。

ロ、藝術的顧慮

一、客觀的妥當性

萬人が見て正しいものでありたい。即ち時間の統一、場所の統一、といふことが大切で、さうでないで、いたづらに頭腦を錯雜させる。またあらはれて來る人物がその性格に於て始終統一して居らなければならぬ。

二、兒童に特有なる眞實性

これは初めにものべたように、子供の時代には、大人の世界と、ちがつて眞實的を有する世界がある。これを無理にかへないで、彼等の信ずる間は之を打こはさない方がよいのである。

III、Poetic Justice

ポエティック、ヂャスティースといふのは、主人公の行爲の價値に正當な判斷を下すといふことである。よい事をしたものには必ず善き酬があるようにといふことである。印度の話には、これが徹底してゐな

いのが多い。即ち佛敎國であるがために、その影響をうけて、善いものも悪いものも、皆同じ様に滅びてしまふのである。これではよろしくない。

また道徳の標準のことなるために、ある時代の童話をそのまま用ふるに困ることがある。例へば噓言といふ事をわるいこととしてゐなかつた時代、野蠻な時代にはこれをむしろ一種の徳として居た時代があつた。かゝるものが今日迄も使つてゐるとしてもそれをそのまま用ふるのはよろしくない。例へば、アフリカの童話に、

「ある男が、他人から五十圓借金をして、それを某月某日の十二時にかへすからその時には鐵砲を用意してどりに來い。といふ。次に豺の所へゆきまた五十圓借りて、その同じ某月某日の十一時に來いといふ。次に山羊から五十圓借りて、十時に來いと約し、猫に五十圓借りて九時に來い。鶏に五十圓借りて八時に來いといふ。いよ／＼その日になると、その男は家の前に米をまいて、自分は陰にかくれてゐる。すると八時になると鶏が來る。米に氣がとられて食べてゐると、其中九時になつて猫が來て、鶏が居るのを見て、金のことは忘れてこれを喰べてゐる。

十時になつて山羊が來て、猫を蹴ころす。十一時に豺が來て山羊をたべる。其處へ十二時に人間が來て、豺が居るので、いきなり之を打つ。扱、男に金を催促すると、豺を打つたのを言ひかゝりにして、さう／＼一文も金を出さなかつた」。

これは、今は通用しない話で、かゝるものはさげなければいけない。

四、内容及形式の整理

内容としては、

(一) 話が誠實であらねばならぬ。

(二) 組立が簡素で、美しい統一を有し、筋がよくつかめるようでありたい。

(三) 優雅でありたい。粗雑なもの、卑俗なもの、突き付ける様な態度に出るものは避けねばならぬ。

(四) 安價な涙をさそふものはよろしくない。俗なものではよろしくない。しかし内容の美といふことは誠に難しいもので、これは、選ぶ我々自身の藝術的素養に待たねばならない。敎養による外はないのである。

形式の方面としては、既に初めに述べたことではあるが、

(一) 今假りに話を組立てる臨畫を線であるとするれば、必要な線だけでも成立するようにしたい。

(二) 話の筋が、主人公を中心として進んで行く様でありたい。

(三) 一つの話の中に二つの筋が出て来る時は、その二つが竝行してはならぬ。必ず主副があらねばならぬ。

以上述べた所を要するに、話は之を選択せんとする場合に、一方に偏せず、多方面からの顧慮を忘れてはならぬのである。また兒童の内存的興味や心的發達のそれ々の階段や、藝術としての形成美、内容美を標準として童話を選択しなければならぬといふことになる。

見たま、

五つ位の男の子が叔父さんらしい人につれられて電車にのつた。早速に今買つて来た玩具の包みをほどいて内部をあらためてゐる。

その顔の輝き……玩具はセル・イド製の軍艦。その中電車が混み合つて来たのでその軍艦を箱におさめた。叔父さんは他の買物と一緒に無雑作にそれを風呂敷包みに入れようとする。と、子供の兩の手はしつかりその箱にしがみついた。眼からは雨がふりさうになつた。頭は横にふつてゐる。

「さあ叔父さんが持つて行かう。こんな大きな箱、坊には持てないよ」かういばれて、子供はま……かたく箱を抱いてしまつた。成程大きな箱であつた。混み合つた電車で、小さい子が、からだの半分もあらう箱を抱いてよろけてゐるのはあぶなく見える。しかしこの子の愛者につよい、手放せないのである。叔父さんの催促がゆるむとこの子は、箱の蓋をそうつとあけて内部をのぞいてゐる。いかにもうれしそう。そのうれしいまゝの顔で叔父さんの方を見やうとすると、叔父さんは思ひ出したように、

「さあ、おだし、わからない坊やだねえ」といふわからない坊やは、だまつてそのまゝ急いで窓の方をむいてしまふ。再び箱をのぞいてさもわかつたといふ様に一人合點して、誰かにそのうれしい心持を應へてもみたいのか、乗合せた人々の方へ、ニコニコ顔をむける。

電車は走つてゐる。ガタンとひどくゆれてその大きな箱が叔父さんによつかる度にその坊やは叔父さんから頬ばされてゐる。